残るリスクが高くなるとの報告もあり、現状ではやはりまずはワクチンによって基本的な免疫をもつことが重要と思われます。このウイルスは、感染すると症状が強くなくとも人体に多彩な影響を及ぼすことがわかっており、「ウィズ・コロナ」などと安易に言えるような代物ではありません。ワクチンを接種して重症化と後遺症を予防し、それでも繰り返して感染することを余儀なくされ、変異の状況に応じてワクチンで免疫を持続していくことによって、はじめてなんとか対処できるような、そんなウイルスだと思われます。

今冬はすでに南半球でのインフルエンザの混合流行が報告されており、日本を含む北半球でも同様の状況になるだろうと予想されます。オーストラリアではコロナは下げどまって流行は続き、インフルエンザはコロナ前とおなじくらいの流行状況でした。大量の発熱患者がでれば、現在のように限定された医療機関のみでは到底診療しきれず、医療体制は確実に破綻します。発熱しても医療機関は対応できず、救急車も搬送困難事例が増加するでしょう。準備するのは今しかありません。

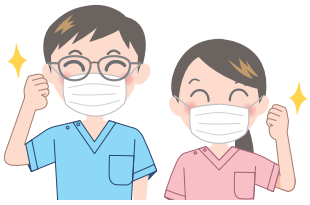
（三重病院院長　谷口　清州）

「新興感染症を想定した訓練」の取り組み

～新興感染症受け入れをイメージした設備確認と地域医療機関との情報共有～

平成２４年４月より感染防止対策の強化を図るべく診療報酬が新設されました。それを機会に、医療機関では手指衛生をはじめ個人防護具の使用等感染防止対策に関した環境が整備され、職員の教育にも尽力されるようになりました。そんな中、令和２年1月より新型コロナウイルス感染症が世界的流行に至り、日本国内も例外なくその対応に追われ現在に至ります。みなさまもご周知のとおりコロナ禍で感染症対策の重要性が非常に高まり、今年度改めて診療報酬が見直されました。新型コロナウイルス感染症対応を踏まえて、従前の感染防止対策を大幅に拡充した内容になっております。具体的には院内職員に向けた教育の継続に加え、「地域医療機関全体が連携し、地域全体の感染対策を整えていく」ことがイメージされ、「新興感染症の発生等を想定した訓練」を行うことが追加されました。当院では、コロナ禍における感染対策の充実の一助として陰圧テントなどの備品を購入しました。そこで9月1日、新興感染症の受け入れを想定した設備準備や新たに購入された備品の運用方法の確認と応用方法の思案、そして地域医療機関と情報共有を行う機会として訓練を行いました。今回は設備運用の確認と情報共有に留まりましたが、今後は具体的な症例をイメージしてより実践的な訓練に取り組み、地域医療機関とより連携を強化し地域における感染予防対策向上を目指していきます。

（感染リンクナース委員会／感染管理小委員会）

職員20名程が力を合わせて、約2時間で完成しました!（設営のみで約1時間）
別棟を診察や処置エリアや待機場所としてイメージしてゾーニング、購入した
陰圧テント付きストレッチャーの稼働確認等も実施

地域連携医療機関、
18施設25名の方に
ご参加いただきました。